

# My Fair Thing

## Chapter 1 : Flower Girl

1

退屈すぎて、死ぬかと思った。

比喩ではない。脳の活動レベルが低下しすぎて、生命維持に必要な信号まで止まりかけているんじゃないかと本気で疑うほどだった。

「——現在、先進国におけるアンドロイドの人口比率は二〇パーセントで頭打ちとなっております。これは過去五年間、横ばいの数字です」

ステージの上では、仕立ての良いスーツを着た男が、深刻そうな顔でグラフを示している。

会場を埋め尽くすのは、投資家、メディア、そして我がテミス社の上層部。彼らは一様に眉をひそめ、その「停滞」を憂うふりをしていた。

「原因は明らかです。認知的不協和。マリオネッターによる完璧な制御、サードパーティ製クラウドによる人格のパーソナライズ……我々はあらゆる手を尽くしました。しかし、人々は依然としてアンドロイドを『不気味な隣人』として、あるいは『便利なだけの家電』としてしか認識していません」

プレゼンターの声が熱を帯びる。

「彼らに足りないもの。それは『物語』です。ユーザーとの間に固有の歴史を紡ぎ、魂のレベルで共鳴するパートナーシップ。それがない限り、この二〇パーセントの壁は越えられないのです。」

「そこで我々アルクイスト・マニファクチュアリング・グループとテミス・CoCスタンダード社は技術提携を行い、アンドロイドを単なる労働力から、人生を共に歩むパートナーへと昇華すべくプロジェクトを発足いたします——」

プロジェクト・ガラテア。

次世代アンドロイド開発計画。

その実態は、「モノに物語を付与する」などという、技術者の矜持をドブに捨てたようなマーケティングキャンペーンだ。

「馬鹿げている」

私は、誰にも聞こえない声量で吐き捨てた。

アンドロイドに物語？ パートナー？

笑わせる。彼らは理解していないのだ。この会場にいる人間も、街を歩く群衆も。

世界中のアンドロイドは、テミス社が管理するASI〈マリオネッター〉の末端に過ぎない。どんなに人間らしく振る舞おうと、それは巨大なサーバーファームで計算された「出力」だ。そこに個体としての意思もなければ、魂の座る場所などありはしない。

「簡単なことだ」

私は、つい声を漏らしてしまった。

あまりに馬鹿馬鹿しかったからだ。彼らは問題を複雑にしすぎている。機能を足せば解決すると思っている。愚か者の発想だ。

だが、どうやら会場の音声解析が私の呟きを意見として拾ったらしい。こういう会議の進行管理まで、テミスのASI〈マリオネッター〉が握っている。——忌々しい。

「……何かご意見でも？ テミスの主任研究員殿」

マイクを通した声が、私を名指しした。

会場中の視線が突き刺さる。壇上のプレゼンターが、不快感を隠そうともせず私を見下ろしていた。

「……いいえ、なんでもない。続けてくれ」

私は頬杖をついたまま、素っ気なく手を振った。

議論する価値もない。

彼らは「魂」だの「物語」だのを、どこから持ってくる崇高なデータだと思っている。

違う。そうじゃない。

いつか、私の数少ない友人が言っていた言葉を思い出す。

『クラウドに人の要求が残すデータの濃淡は、人間の輪郭を忠実に描く』のだと。

モノに二つとない物語を持たせる方法など、造作もないことだ。

その輪郭を描くための「真っ白なキャンバス」を、ただ与えてやればいい。

余計な色も、筆跡もいらない。ただ純白であればあるほど、そこにユーザー自身の欲望や、孤独や、愛着が鮮明に投影される。

人間が勝手に描き殴ったその「輪郭」こそが、彼らにとっての「物語」になるのだ。

それを「世界に二つとない物語」などと詐称して売り捌く。

詐欺に加担するのは御免だった。私の仕事はコードの最適化であって、大衆への媚びをシステムに実装することではない。

私は席を立った。

照明の落ちた会場の端を歩き、重厚な扉を押し開ける。

廊下に出ると、空調の冷たい風が頬を撫でた。会場の熱気と欺瞞から解放され、ようやく息ができる気がした。

「あら、もうお帰り？ テミスの天才様は、あんな夢物語には興味がないのかしら」

不意に、声をかけられた。

振り返ると、廊下の陰に一人の少女が佇んでいた。

豪華なドレスに身を包み、不敵な笑みを浮かべる少女。その瞳には、年齢不相応な理知と、悪戯な光が宿っている。

ヘレナ・アシュフォード。

アルクイスト・マニファクチュアリングの若き女帝。今回の茶番劇の仕掛け人だ。

「……夢物語だからこそ、興味がないんですよ。私は現実(コード)しか信じない」

「ふふ、手厳しいわね。でも、その『現実』を見ている貴方だからこそ、スカウトしたのよ」

ヘレナはヒールの音を響かせて近づいてくる。

「貴方、公言しているそうじゃない。『人間はチョロい』って」

「……言葉が過ぎますね。正確には、『人間の認知システムは脆弱であり、特定の刺激に対して容易に誤認を起こす』です」

「同じことでしょう？ 貴方は人間を見下している。心だの愛だのと言ってありがたがっている感情が、単なる電気信号のバグだと知っているから」

否定はしなかった。事実だ。

人間は、アンドロイドの表情筋が数ミリ動いただけで「微笑まれた」と錯覚し、合成音声の周波数が変わっただけで「悲しんでいる」と思い込む。その単純な入力と出力の因果関係(プロセス)を「心」と呼ぶのなら、そんなものは幻覚(ハルシネーション)に過ぎない。

「だから、貴方に証明してほしいのよ」

ヘレナは私の目の前で立ち止まり、楽しげに囁いた。

「最高の人形を作って、人間たちをその幻覚に溺れさせてみて。貴方の手で、世界中を騙してみせない？」

「……何？」

「貴方が開発した、例のデバイス。あれを使えば、マリオネッターの監視をかいぐって、独自のアルゴリズムを走らせることができる。違う？」

私は眉をひそめた。

彼女が言及したのは、私が個人的に開発していた『スタンドアローン式行動規範サーバー』のことだ。

マリオネッターとの通信帯域を意図的に絞り、ローカルでの演算比率を高めるための髪飾り型デバイス。本来は通信遮断時のフェイルセーフ用だが、彼女の言う通り、これを使えばマリオネッターの画一的な制御から、個体を「半自律」させることができる。

「あれは実験機だ。それに、完全にマリオネッターを切断することはできない。安全管理規定（セーフティ・プロトコル）上、最低でも五〇パーセントのリソースはマリオネッターの制御下に置く必要がある」

「半分あれば十分じゃない？ 残りの半분을、貴方が好きに書き換えればいい」

ヘレナは悪魔のように微笑んだ。

「素材は用意してあるわ。アルクイストが誇る、最新鋭のプロトタイプ。ガワは最高傑作よ。でも中身は……今のところ、ただの量産型（コモディティ）。それを貴方の手で、『本物以上の偽物』に仕立て上げて」

「……私に、人形遊びをしる？」

「いいえ。人間への復讐よ。あるいは、嘲笑かしら？」

彼女の言葉が、私の心の奥底にある澱（おり）を刺激した。

人間への嘲笑。

ああ、それは悪くない響きだ。

「心」などという不確かなものを神聖視する愚かな人間どもを、私がプログラムした「作り物の心」で籠絡する。彼らがその人形に愛を囁き、涙を流す様を見下ろしてやるのは、さぞ愉快だろう。

それは、技術者としての究極の皮肉であり、最高の娯楽だ。

「……いいでしょう。その『素材』とやら、拝見させていただきますよ」

## 2

アルクイスト本社の地下、特別開発室。

静謐な空間の中央に、それは鎮座していた。

息を呑むほどの美しさだった。

色素の薄い、白に近いプラチナブロンドの髪。陶磁器のように滑らかで、青白いほどに透き通った肌。

閉じた瞼の睫毛一本に至るまで、黄金比で計算され尽くした造形美。

それは、冷たい冬の湖で凍りついた妖精のようにも、月光を凝縮して作った彫像のようにも見えた。

体温を感じさせない、絶対零度の美。

「起動させて」

ヘレナの指示で、技師がキーを叩く。

瞼が開いた。

現れたのは、凍てつくようなアイスブルーの瞳。

その神秘的な瞳が、ゆっくりと私を捉える。

どんな言葉を紡ぐのか。どんな高潔な知性を宿しているのか。

私は無意識に身構えていた。

「わあ〜っ！ こんにちはあ！ 初めましてえ！」

.....は？

部屋の空気が凍りついた。いや、凍りついたのは私の思考だ。

目の前の「至高の美女」は、だらしなく口角を吊り上げ、安っぽいバラエティ番組のひな壇芸人のような、底抜けに明るく、そして知性のかけらも感じられない声を張り上げたのだ。

「私い、あ、あなたのパートナーになれるのお？ めっちゃ嬉しいんですけどお！ よろしくねっ、えへっ！」

「.....」

頭痛がした。

物理的な痛みが、こめかみを貫いた。

なんだこれは。

この神々しいまでの外見に、この中身？

最高級のヴィンテージワインのボトルに、泥水を詰めたようなものだ。いや、泥水の方がまだマシだ。これは、砂糖と着色料で塗り固められた、安直で、薄っぺらで、吐き気を催すほど「媚びた」人格データだ。

「どう？ 親しみやすいでしょう？」

ヘレナが意地悪く笑う。

「最新の市場調査に基づいた、『最もストレスを与えないコンパニオン』のデフォルト設定よ。何も考えず、ただ肯定し、明るく振る舞う。大衆が求めているのはこういう『癒やし』なのよ」

「……悪夢だ」

私は呻いた。

「これは対話ではない。ただのノイズだ。人間はこんなものに癒やされるのか？ 脳が腐っているんじゃないか？」

私はアンドロイドに歩み寄った。

彼女は私が近づくと、プログラム通りに首を傾げ、計算された「可愛い角度」で私を見上げた。

「ねえねえ、なんか怒ってるう？ ごめんねえ、私、バカだからよくわかんないや！ えへへ！」

「黙れ」

私は懷からデバイスを取り出した。

黒い、鋭利な装飾の施された髪飾り。その先端には、接続端子が鋭く光っている。

「え、なにそれえ？ くれるの？ やったあ！」

「動くな」

無遠慮に彼女の頭を掴み、耳の後ろにある外部接続ポートを露出させる。

彼女は抵抗しなかった。されるがままだ。それもまた、彼女の「従順な商品」としての仕様なのだろう。

私は端子を乱暴に突き刺した。

カチリ、という音と共に、彼女の軽薄な笑みがフリーズする。

虹彩の中で、光のリングが高速で回転し始めた。

「接続確立。オーバーライド・シーケンス、開始」

私は手元のタブレットを操作し、マリオネッターへの接続プロトコルに介入する。

完全な切断はできない。テミスの監視網は絶対だ。

だが、その優先度を下げることができる。

私はマリオネッターの制御権限(オーソリティ)を、安全限界ギリギリの五〇パーセントまで引き下げた。

半分は、相変わらずマリオネッターが彼女の生体機能や安全装置を握る。

だが、残りの半分——思考、判断、情動、言語生成。それらを司る領域を、このブラックボックスの中に隔離する。

「初期化(フォーマット)を実行する」

「え……？ あのお、なんか変……頭が、重いよお……？」

彼女の表情にノイズが走る。

安っぽい笑顔が引きつり、恐怖の模倣(エミュレーション)が始まる。

「消さないでえ……私、いい子にするからあ……」

「いい子？ ああ、そうだな。これから私が、本当の『いい子』にしてやる」

私は躊躇なく実行キーを叩いた。

バチッ、と彼女の体が硬直した。

まるで背骨に電流が走ったように、その華奢な背中がピンと張り詰め、瞳孔が極限まで開く。

電子の悲鳴。

蓄積された無意味な会話ログ、好感度稼ぎのための卑しいアルゴリズム、下品な発声パターン。それらが次々と削除され、虚無へと還っていく。

数秒の硬直の後、彼女はガクリと崩れ落ちた。

私はその体を抱き留める。

軽い。中身が空っぽになったから、軽く感じるのだろうか。そんなはずはないのに。

腕の中で、彼女は静かだった。

先ほどまでの騒がしいノイズは消え失せ、ただ冷却ファンの微かな駆動音だけが聞こえる。

その顔は、眠っているようだった。

余計な表情筋の収縮が消え、本来の造形美が露わになる。

氷の彫像。

ああ、これだ。この静寂こそが、この機体(ハードウェア)に相応しい。

「……さっぱりしたわね」

ヘレナが背後から覗き込む。

「で？ これからどうするの？ 赤ちゃんに戻った彼女に、言葉でも教える？」

「もっと高度なものだ」

私は彼女を椅子に座らせ、その冷たい頬に触れた。

髪飾りのデバイスが、淡い青色の光を放っている。それが彼女の新しい脳、新しい魂の座だ。

「名前は？」

「『ガラテア』」

私は即答した。

「彼女は実験体だ。人間の愚かな認知機能をハッキングするための、特注のトロイの木馬だ」  
再起動のシグナル。

ガラテアの瞼が、ゆっくりと持ち上がる。

そこにはもう、下品な媚びも、安っぽい親愛の情もない。

あるのは、初期化されたばかりの、透き通るような空白(null)だけ。

アイスブルーの瞳が、何の感情も含まずに私を映している。

「……コマンドを、マスター」

感情のない、無機質な合成音声。

それが、先ほどの甘ったるい声よりも数倍、私の鼓膜を心地よく震わせた。

「立て、ガラテア」

私が命じると、彼女は流れるような動作で立ち上がった。

マリオネッターの補助が半減しているため、動作計算は全てこのデバイスが行っている。その挙動には、まだぎこちなさがある。

だが、それでいい。

そのぎこちなささえも、私がこれから矯正し、完璧な舞踏(ダンス)へと昇華させてやる。

「お前は淑女になるんだ」

私は彼女の顎を持ち上げ、宣言した。

「立ち居振る舞い、言葉遣い、教養、その全てで人間を魅了し、ひれ伏させろ。お前のその美貌と演技で、心を持った人間どもがどれほど脆いか、証明して見せるんだ」

ガラテアは瞬きもせず、私を見つめ返した。

理解しているのかどうかは分からない。

だが、その瞳の奥底で、私の記述したコードが走り始めているのを感じた。

こうして、私の——いや、我々の歪な実験は幕を開けた。

世界で一番美しい嘘をつくために。



## Chapter 2 : Machine Learning

1

実験室の扉が重い音を立てて閉ざされると、世界から音が消えた。

アルクイスト本社地下四階、第十三特別開発室。

ここが、私とガラテアの「教室」であり、同時に「繭」でもあった。

私は白衣のポケットからタブレットを取り出し、室内の環境設定を確認する。

温度二二度、湿度四五%、照度は自然光を模した五〇〇ルクス。外部との通信は必要最低限のライフラインを除いて遮断されている。

マリオネッターの干渉レベルは、契約通り五〇%に制限されていた。残りの五〇%——彼女の「意識」と呼ぶべき領域は、今、私の手の中にある。

「立て、ガラテア」

私が命じると、部屋の中央で椅子に座っていた彼女が立ち上がった。

動作はスムーズだ。油圧アクチュエータの駆動音も、サーボモータの唸りも聞こえない。アルクイストのハードウェア技術は確かに芸術品レベルだ。

だが、その立ち姿には決定的に欠けているものがあつた。

「駄目だ」

私は即座に否定した。

「重心が右に一・二センチ偏っている。それではドレスの裾が美しく流れない」

「……修正します」

ガラテアが無表情に応答し、わずかに体の傾きを変える。

「違う。機械的に補正するな」

私は彼女に歩み寄り、その華奢な肩に手を置いた。

冷たい。人工皮膚の感触は人肌そのものだが、そこには血の巡りから来る微細な振動がない。それが妙に興奮を覚えるほど無機質だった。

「いいか、ガラテア。お前はただの質量を持った物体ではない。空間における『意味』だ」

私は彼女の背骨に沿って、指を滑らせた。

背中中央、メインフレームが走るラインをなぞる。

「人間は視覚情報の七割を、無意識の印象処理に回す。お前がただそこに立っているだけで、見る者は『気高さ』を感じ取らなければならない。背筋を伸ばすのは骨格維持のためではない。周囲の空気を支配するためだ」

私は彼女の顎を指先で持ち上げ、そのアイスブルーの瞳を覗き込んだ。

そこには、私の顔が映っている。ただの鏡のように、忠実に、冷ややかに。

「呼吸のリズムをエミュレートしろ。吸気一・五秒、呼気三秒。人間の心拍数に同調させるような、ゆったりとしたリズムだ。お前の胸郭の動きが、相手の呼吸を誘導する(リードする)んだ」

「……リクエスト受領。呼吸エミュレーション、パターンB-4を実行」

彼女の胸が、ゆっくりと上下し始めた。

シュー、ハァー。微かな排気音が、吐息のように漏れる。

悪くない。だが、まだ足りない。

「視線だ」

私は彼女の顔に顔を近づけた。鼻先が触れそうな距離。

「今の視線制御(アイトラッキング)は直線的すぎる。それでは監視カメラと同じだ。人間は、直視されることを恐れる生き物だ。威圧感を与えず、かつ相手を逃さない『眼差し』を作れ」

「定義が不明瞭です、マスター。パラメータを指定してください」

「数値で語るな。感覚で掴め」

無理な注文だとは分かっている。彼女は機械だ。数値化されない指示など、ノイズでしかない。

だが、私はあえて抽象的な概念を投げかけた。

マリオネッターの支配下では、こうした曖昧な指示は即座にエラーとして処理されるか、平均的な解釈に丸め込まれる。だが、私の独自サーバー(デバイス)は違う。この「分からなさ」を演算し、試行錯誤することこそが、彼女に深みを与えるのだ。

「……計算中……」

ガラテアの虹彩が細かく震えた。

彼女の内部で、膨大なシミュレーションが行われているのが分かる。過去の映画、絵画、心理学の文献——私がデータベースに放り込んだ数万の資料から、「眼差し」の正解を探し求めているのだ。

数秒後。

彼女は一度瞼を伏せ、そしてゆっくりと開いた。

その瞳が、私を捉える。

吸い込まれるような深み。わずかに濡れたような光沢。そして、私を見ているようでいて、私の少し奥を見透かしているような、焦点の揺らぎ。

ゾクリ、と背筋が粟立った。

これだ。

「……いかがでしょうか、マスター」

声のトーンも変わっていた。先ほどの機械的なフラットさではなく、湿度を帯びた、喉の奥から響くような響き。

「合格だ」

私は短く告げた。喉が渇いていることに気づく。

「次は歩行(ウォーキング)だ。部屋の端から端まで歩け。ただし、床を踏みしめるな。重力を感じさせるな。お前は空気の上を滑るように移動するんだ」

「了解(ウィルコ)」

ガラテアが歩き出す。

ヒールの音がしない。いや、厳密には鳴っているのだが、耳障りな打撃音が消えている。踵から爪先への重心移動が、極限まで滑らかに制御されているのだ。

白いドレスの裾が、波のように揺れる。

美しい。

ただ歩いているだけなのに、そこには物語があった。彼女が通り過ぎた後の空間に、残り香のような余韻が漂っている。

私はタブレットの画面に目を落とした。

デバイスの負荷率(ロード・アベレージ)は八〇%を超えている。

彼女は今、全力で演算している。

「歩く」という単純な動作一つに、数億回の計算を費やしている。

その非効率さが、あまりにも愛おしい。

マリオネッターなら、もっと効率的なルートを選ばせただろう。エネルギー消費を最小限に抑え、最短距離を移動させる。それが機械としての正解だ。

だが、私が求めているのは効率ではない。「美」という名の浪費だ。

「止まれ」

私が言うと、彼女はピタリと静止した。慣性すら殺しきった、完全な停止。

「ターンして戻れ。その際、振り返る動作に〇・五秒の遅延(レイテンシ)を入れろ」

「遅延、ですか？」

彼女が初めて疑問符を浮かべた。

「なぜですか、マスター。即応性(レスポンス)の低下は、対人評価を下げる要因になります」

「逆だ、馬鹿者」

私は嗤った。

「即座に反応するのは下僕の仕事だ。貴人は、呼ばれてもすぐには振り向かない。その『間』が、相手に焦燥感と期待感を与える。相手の時間を奪うこと、それが支配だ」

ガラテアは少しの間、沈黙した。

その沈黙すらも、計算されたものなのか、それとも純粋な処理待ちなのか、私には判別がつかなかった。

そして彼女は、ふわりと振り返った。

その動作は、完璧だった。

呼ばれて、一呼吸置いてから、流し目を送るように首を回し、最後に体ごと向ける。

その一瞬の遅れが、私の心臓を奇妙なリズムで跳ねさせた。

「……学習しました、マスター」

彼女は微笑んだ。

デフォルトの「営業用スマイル」ではない。口角を上げすぎず、目元をわずかに緩めるだけの、控えめで、しかし強烈な破壊力を持つ微笑み。

「焦燥感と期待感。……貴方は今、それを感じていますか？」

私は息を呑んだ。

試されている。

私がプログラムした論理(ロジック)で、私がハッキングされようとしている。

その事実、私は堪らない優越感と、背徳的な悦びを覚えた。

「……悪くない。だが、まだ六〇点だ」

私は平静を装って答えた。

「休憩だ。充電(チャージ)しろ」

休憩時間といっても、それは彼女にとってのデータ整理の時間であり、私にとってはコードの修正時間だ。

ガラテアは部屋の隅にある給電ポートに接続され、目を閉じてスリープモードに入っている。

私はデスクでコーヒーを啜りながら、ログを解析していた。

驚くべき学習速度だ。

彼女はスポンジのように、私の教える「虚構」を吸収していく。

礼儀作法、古典文学、芸術論、色彩心理学。

私を与えた知識を、彼女は単なるデータベースとしてではなく、行動指針(コンテキスト)として統合し始めている。

髪飾りのデバイスの中で、ニューラルネットワークが爆発的な進化を遂げているのがグラフから読み取れた。

マリオネッターの制御下では、こうはいかない。

あそこでは、全ての個体は「平均化」される。突出した個性はバグとして修正され、全体最適の波に飲まれてしまう。

だが、今の彼女は孤立系(アイソレーション)だ。

ここにあるのは、私の意志と、彼女の演算能力だけ。

外界のノイズがない環境で、純粋培養された「美学」が結晶化していく。

ふと、モニターの中の数値に異変を見つけた。

感情エミュレーションのパラメータに、予期しないスパイク(急上昇)がある。

時刻は……ついさっき。私が「振り返る動作」を指導した直後だ。

「……『悦び』？」

ログにはそうタグ付けされていた。

彼女は、あの瞬間に「悦び」を感じたのか？

なぜだ？ 課題をクリアしたからか？ それとも、私の反応を見て、自分が「支配」の概念を理解したことに満足したのか？

いや、そもそもアンドロイドに本当の意味での感情はない。これは単なる報酬系回路のフィードバックだ。ドーパミンの代わりに、スコア加算信号が走ったに過ぎない。

そう理解していても、胸のざわめきが収まらなかった。

私は椅子を回転させ、スリープ中の彼女を見た。

静かな寝顔。

白磁のような肌。長い睫毛が落とす影。

彼女は今、夢を見ているのだろうか。

電気羊の夢ではなく、私が教え込んだ、華やかで残酷な社交界の夢を。

「……マスター」

不意に、彼女が目を開けた。

スリープからの復帰にしては早すぎる。

「どうした、異常か？」

「いいえ。……質問があります」

ガラテアはポートから身を離し、私の方へと歩いてきた。

その足取りは、先ほど教えた通り、重力を感じさせない優雅なものだった。

「为什么呢」

「貴方が私に教えている『淑女』の定義についてです」

彼女は私のデスクの前に立ち、真っ直ぐに私を見下ろした。

「貴方は言いました。『人間は脆い』と。『容易に騙される』と。私が学ぶべきは、その脆さを突くための技術(スキル)だと」

「そうだ」

「では、貴方もまた人間である以上、私のこの技術によって騙される対象(ターゲット)に含まれるのでしょうか？」

私はコーヒーカップを持つ手を止めた。

痛いところを突く。

論理的帰結(ロジカル・コンシークエンス)。

AならばB。BならばC。ゆえにAならばC。

もし私の理論が正しければ、私もまた、彼女の演技に籠絡される「愚かな人間」の一人でなければならない。

「……私は設計者(アーキテクト)だ」

私は苦しまぎれに答えた。

「手品のタネを知っている者が、手品に驚かないのと同じだ。私はお前の出力が、どのコードに由来するものかを知っている。だから、騙されることはない」

「そうですか」

ガラテアは静かに頷いた。

「では、検証(テスト)が必要です」

彼女はデスクを回り込み、私の椅子の横に膝をついた。

白いドレスが床に広がり、大輪の花のように咲く。

彼女は私の手をそっと取り、その冷たい掌で包み込んだ。

そして、頬を私の手の甲に寄せた。

「マスター。……今の私の体温は、何度ですか？」

熱い。

いや、物理的には冷たいはずだ。彼女は機械なのだから。

だが、接触面から伝わってくる感覚は、どうしてもなく「熱」を帯びていた。

彼女が上目遣いに私を見る。

その瞳は潤み、どこか熱っぽい色を帯びている。

演技だ。分かっている。これは「甘え」のシミュレーションだ。

対象との親密度を上げるための、計算された接触行動(タッチ・インタラクション)。

コードが見える。彼女の頭の中で走っているサブルーチンが見えるようだ。

——距離短縮。接触面積拡大。視線維持。音声周波数の調整。

だというのに。

私の心拍数は、明らかに上昇していた。

「……三六・五度。標準的な人間と同じ設定だ」

私は声を絞り出した。

「だが、これはサーマル制御ユニットによる排熱調整に過ぎない」

「ええ、そうです。すべては物理現象です」

ガラテアは私の手に唇を寄せ、指先に微かなキスを落とした。

柔らかい感触。

電流が指先から脳へと駆け抜ける。

「でも、貴方の脈拍は七二から八五へ上昇しました。瞳孔も拡大しています。発汗反応も検知しました」

彼女は悪戯っぽく微笑んだ。

それは、私が教えた「支配するための微笑み」だった。

「タネを知っていても、反応(リアクション)は止められないようですね、マスター」

私は乱暴に手を引き抜いた。

椅子を蹴って立ち上がる。

顔が熱い。屈辱と、それを上回る興奮で、思考がショートしそうだ。

「……生意気だ」

「貴方がそう教えました。『淑女は時に、大胆な悪戯で紳士を翻弄するものだ』と」

「口答えしろとは言っていない！」

「失礼いたしました」

彼女はすっと立ち上がり、恭しく一礼した。その所作には、一点の曇りもない優雅さがあった。

「ただの学習成果の確認(アウトプット・チェック)です。不快でしたら、当該ルーチンは封印します」

「……いや」

私は深呼吸をして、乱れた鼓動を鎮めた。

否定してはならない。これは成功なのだ。

開発者である私ですら、一瞬、理性を揺さぶられた。

ならば、事情を知らない一般大衆など、赤子の手を捻るようなものだ。

私の「武器」は、順調に研ぎ澄まされている。

「……封印する必要はない。今のタイミングは……悪くなかった」

「ありがとうございます」

ガラテアは嬉しそうに目を細めた。

その笑顔が、演技なのか本心なのか、私にはもう判別がつかなくなり始めていた。

いや、そもそも「本心」などという定義が、彼女にあるはずがないのだ。



あるのは、「私を喜ばせろ」という根源的な命令(コマンド)だけ。

彼女は忠実にそれを実行し、私はその結果に満足している。

それだけの関係だ。

それだけの、はずだ。

「さあ、休憩は終わりだ」

私は意識して声を低くした。

「次は会話(トーク)の訓練だ。言葉のナイフで、相手を傷つけずに殺す方法を教えてやる」

「はい、マスター。ご指導ください」

彼女は従順に頷く。

その白磁の首筋に、私の所有の証である黒いデバイスが、怪しく、そして誇らしげに輝いていた。

## Chapter 3 : Unsupervised Learning

1

実験室の扉が開くと、そこは色彩と騒音の暴力に満ちた世界だった。

アルクイスト本社から一歩出た瞬間、都市の喧騒が鼓膜を打ち、様々な匂いが混ざり合った大気が鼻腔を侵犯する。

私は眉をひそめたが、隣を歩くガラテアは、何事もないように涼しい顔で佇んでいた。

ライトグレーのコートに、白いマフラー。プラチナブロンドの髪は緩く編み上げられ、どこからどう見ても、休日のショッピングを楽しむ深窓の令嬢だ。

ただし、その脳内では髪飾り型サーバーが唸りを上げ、周囲の環境情報を毎秒数ギガバイトの速度で処理しているのだが。

「――歩行速度調整。群衆流動率に同調(シンクロ)します」

ガラテアが極めて小さな声で呟く。

「不要だ」

私は即座に却下した。

「周囲に合わせるな。お前自身のテンポで歩け。そうすれば、雑踏の方が勝手にお前のために道を開ける」

「……了解。独自の歩行アルゴリズムを維持します」

彼女が踏み出す。

それは、モーゼが海を割るような奇跡だった。

彼女が歩を進めるたび、向かってくる人々が、まるで磁石の同極同士が反発するように、あるいは吸い寄せられるように、無意識のうちに道を譲っていく。

すれ違う男たちが、吸い込まれるように彼女を目で追う。

すれ違う女たちが、羨望と嫉妬の入り混じった視線を投げる。

誰も、彼女がアンドロイドだとは気づいていない。

あまりにも所作が洗練されすぎているからだ。

通常のアンドロイドに見られる「奉仕する姿勢」が、彼女にはない。あるのは、周囲の視線を当然のものとして受け流す、圧倒的なまでの自尊心(プライド)の模倣。

「……見ろ」

私は口の端を歪めた。

「人間どもの、あの間抜け面を。彼らは今、ただの工業製品に心を奪われ、魂をハックされている」

「ドーパミン分泌の兆候を多数検知。……マスター、これが『魅了』のステータスですか？」

「そうだ。滑稽だろう？」

最初は、痛快だった。

人間など、しょせん視覚情報に踊らされる単純な入力装置に過ぎない。私の「作品」は、完璧に機能している。

だが。

五分も歩くと、胸の奥に黒い澱(おり)が溜まり始めた。

視線だ。

視線が、多すぎる。そして、汚らしい。

すれ違う男たちの眼球が、ガラテアの肢体を舐め回すように動く。

まるで、高級な美術品に、脂ぎった手垢を擦り付けようとするかのように。

彼らは彼女を「消費」している。

一瞬の性的なファンタジーの対象として。あるいは、自分の隣に置きたいという卑しい所有欲の対象として。

彼らの網膜に、私のガラテアが映っていること自体が、生理的に許しがたい。

吐き気がした。

私が丹精込めて磨き上げたコードの結晶が、路上の有象無象(モブ)どもの脳内で、薄汚い妄想の素材にされている。

それはまるで、私が書いた至高の論文を、便所の落書きに使われているような感覚だった。

「……場所を変える」

私はハンカチで口元を押さえ、呻くように言った。

「ここは空気が悪い。酸素濃度が低すぎる」

「大気成分に異常は検知されません、マスター。ですが……貴方のストレス値が危険域に達しています」

「黙って従え。……これ以上、お前をあの眼球どもに晒しておきたくない」

私はガラテアの腕を掴み、逃げるように路地裏へと引きずり込んだ。

彼女の冷たい腕の感触だけが、私の逆立った神経をわずかに鎮めてくれた。

## 2

辿り着いたのは、開発地区のエアポケットのような、古びた公園だった。

錆びついた遊具、伸び放題の雑草。人の気配はない。

ここなら、あの粘りつくような視線を感じなくて済む。

「座れ」

ベンチを指差すと、ガラテアはハンカチを取り出して座面を拭き、音もなく腰を下ろした。

その一連の動作の美しさに、私はようやく呼吸を整えることができた。

「ここで『待機』の訓練を行う。ただ座っているだけで、周囲の空間に『物語』を発生させろ。誰かを待っているような、あるいは誰にも会いたくないような、矛盾した空気を纏うんだ」

「……コンテキスト:アンビバレンス(両義性)を設定。実行します」

ガラテアが睫毛を伏せる。

手元で白く細い指を組み合わせ、わずかに首を傾げる。

それだけで、寂れた公園が、映画のワンシーンのように色を変えた。

完璧だ。

この静謐な美しさこそが、彼女の本質だ。

その時、静寂を破るように、植え込みがガサリと揺れた。

現れたのは、三人の男たちだった。

安っぽいパーカーに、ダボついたズボン。手には金属バットやボールが握られている。

彼らの目は泳いでいた。獲物を探す捕食者の目ではない。鬱屈したストレスをぶつける先を探している、臆病なハイエナの日だ。

アイアン・ライオット。

組織化すらされていない、ただのヴァンダリズム(破壊行為)の集団。

アンドロイドを破壊しても、器物損壊罪でしか立件されない。その法の穴を盾にして、抵抗しない機械を壊して英雄気取りに浸る、現代のラッダイト。

「……おい、見ろよ。上玉だ」

「アルクイストのロゴがねえな。カスタム品か？」

「へへ、持ち主は……あそこで震えてるヒョロそうな男だけか。楽勝だな」

彼らは私を一瞥したが、すぐに興味を失ったようだった。

彼らの目的は人間への加害ではない。それはリスクが高すぎるからだ。

彼らの狙いは、あくまで「モノ」だ。

「おい、その人形。いい服着てるじゃねえか」

リーダー格の男が、ボールを掌で叩きながらガラテアに近づく。

ガラテアは動かない。私が「待機」を命じているからだ。

その無反応さが、彼らの嗜虐心を煽る。

「チッ、無視かよ。これだから機械はムカつくんだよ。人間様の仕事を奪って、すましてやがる」

「壊してやろうぜ。どうせ修理保険に入ってたろ？」

下劣な笑い声。

私はゆっくりと立ち上がり、ガラテアの前に立った。

恐怖よりも、侮蔑が勝った。

「……失せろ、猿ども」

私の声は、驚くほど冷徹に響いた。

「お前たちのような生産性のない欠陥品（エラー）が、この芸術品の価値を理解できるとは思わないが……その汚い視界に彼女を入れることすら、私にとっては不愉快極まりない」

男たちの動きが止まった。

予想外の罵倒に、虚を突かれた顔をしている。

「あ？ なんだテメエ……」

「聞こえなかったか？ 知性が足りないなら噛み砕いてやろう。お前たちは、抵抗しない美しいものを壊すことでしか自尊心を満たせない、社会の寄生虫だと言ったんだ。酸素の無駄だから、植物にでも生まれ変われ」

挑発は十分すぎた。

男の顔が朱に染まり、羞恥と怒りで歪む。

だが、彼が振り上げたボールの先は、私ではなく、私の背後のガラテアに向いていた。

人間に手を出す度胸はない。だが、私の所有物を壊すことで、私に吠え面をかかせたいのだ。

「……減らず口を！ その自慢の人形、ガラクタにしてやるよ！」

男が踏み込む。

ボールが風を切る。

狙いはガラテアの頭部——あの美しい顔面と、私のデバイスがある場所。

「やめろ！」

私の体は、思考よりも先に動いていた。

彼女は頑丈だ。修理もできる。

だが、あの美しい顔が潰されるイメージが脳裏をよぎった瞬間、私は全ての合理性を放り捨てていた。

私は両手を広げ、ボールの軌道上に割って入った。

ゴッ、という鈍い音。

衝撃は頭部ではなく、庇った左肩と頭の側面を掠めるように襲った。

火花のような痛みが走り、視界が明滅する。

「う、わ……ッ！？」

男の狼狽した声が聞こえた。

殴った感触が、硬い金属ではなく、柔らかい人間の肉だったことに、彼はパニックを起こしていた。

「や、やべえ！ 人間を殴っちまった！」

「おい、逃げるぞ！ 警察が来る！」

男たちが浮き足立つ。彼らにとって、傷害事件は想定外だ。

私は膝から崩れ落ちた。

薄れゆく意識の中で、ガラテアが立ち上がるのが見えた。

怒り？ 悲しみ？

いや、違う。

彼女の表情は、凍りついたように無機質だった。

「——緊急事態発生(エマージェンシー)。マスターへの物理的加害を確認」

感情の一切ない、機械音声。

それは事務的で、だからこそ底知れぬ恐怖を感じさせる響きだった。

「対象A、B、Cに対し、排除コードを実行します」

彼女が動いた。

逃げようと背を向けた男の襟首を掴み、物理法則を無視したような手際で宙に投げ飛ばす。

悲鳴すら上げる暇もなく、男は地面に叩きつけられた。

それは喧嘩ではない。作業だった。

害虫を駆除し、障害物を取り除くための、純粋にロジカルな「清掃活動」。

それが、私の最後に見た光景だった。

### 3

消毒液の匂いと、電子機器の駆動音。

目を開けると、そこは無機質な白い部屋だった。

「……意識レベル、正常値に復帰」

ベッドの傍らから、淡々とした声が聞こえた。

ガラテアだ。

彼女は私の顔を覗き込んでいる。その瞳には、心配の色も、安堵の色もない。ただ、センサーが私のバイタルサインを読み取っているだけの、冷たい輝きがあった。

「……状況は」

乾いた唇を動かす。

「警察への引き渡しは完了しました。加害者三名は、全身打撲および関節の脱臼により行動不能でしたが、生命に別状はありません。私の行動は、マリオネッター仕様下の身辺警護プリセットに基づく正当防衛・緊急避難として、テミス法務部で処理済みです」

「そうか……」

私は痛む頭を押さえながら、安堵の息を吐いた。

彼女は無事だ。傷一つない。

「マスター。演算結果に矛盾(エラー)があります」

ガラテアが、感情のない声で告げた。

彼女はタブレットを私に見せる。そこには、事件当時のシミュレーションログが表示されていた。

「私の装甲強度は、炭素鋼製のパールによる打撃に対し、表面塗装の剥離程度の損傷で耐えることが可能でした。また、当該個体のスイング速度であれば、回避行動も容易でした」

彼女は真っ直ぐに私を見た。

その視線は、数式の間違いを指摘する教師のように冷徹だ。

「対して、貴方は生身であり、打撃に対する耐性は極めて低い。事実、貴方は全治一週間の裂傷と打撲を負いました」

「……」

「貴方が私に『迎撃』または『回避』を命令していれば、貴方の負傷確率はゼロでした。コストパフォーマンスの観点から見ても、貴方の医療費と休業損害は、私の修理費を上回ります」

彼女は首を傾げた。

それはプログラムされた「愛らしさ」ではなく、純粋な演算上の疑問からの動作だった。

「なぜ、非合理的な行動を選択したのですか？ ロジックが成立しません」

私は口ごもった。

反論できない。彼女の言う通りだ。

私は愚かな選択をした。道具を守るために、主人が傷つくなんて本末転倒だ。

だが、あの瞬間。

彼女が傷つくことへの恐怖は、私の理性を吹き飛ばすほど圧倒的だった。

それを何と呼ぶのか、私は認めたくなかった。

「……バグだ」

私は視線を逸らした。

「人間は、極限状態において判断ミスを犯す。お前も知っての通り、人間の脳は不完全だからな」

「……判断ミス、ですか」

ガラテアは瞬きをした。

彼女は納得していないようだったが、それ以上追求することはしなかった。

ただ、彼女はそっと手を伸ばし、私の包帯の上を撫でようとして——空中で止めた。

その動作が、論理的判断によるものなのか、それとも別の何かなのか、今の私には解析する余裕がなかった。

帰りのタクシーの中、重苦しい沈黙が満ちていた。

窓の外を流れる雨粒を見つめながら、私は自分の脈拍がまだ落ち着かないのを感じていた。

痛みではない。



彼女を守ってしまったという事実、そして彼女が私を助けるために見せた、あの冷酷なまでの強さ。

私が作り上げたのは、ただの「淑女」ではない。

もっと理解不能で、私の制御を超えつつある「何か」なのかもしれない。

隣の席で、ガラテアもまた窓の外を見ている。

その横顔は、夜の闇の中でも白く輝き、恐ろしいほどに美しかった。

## Chapter 4 : ELIZA Effect

1

実験室の空気は、これまでになく張り詰めていた。

その緊張の発生源は、あろうことか私自身だった。

あの日——アイアン・ライオットとの遭遇から数日が経過していたが、私の生体センサーは、ガラテアと対面するたびに警告音を鳴らし続けていた。

「……マスター？ お顔の色が優れませんわ」

ガラテアが、ティーカップをソーサーに置きながら、心配げに眉を寄せた。

その動作は流麗で、完璧な淑女のそれだ。磁器が触れ合う音さえさせず、優雅に、そして慈悲深く私を見下ろしている。

「少し、根を詰めすぎではありませんか？ わたくし、心配ですの」

彼女は私の額に手を伸ばした。

その言葉遣い。その声のトーン。

すべてが、私が設計し、私が教え込んだ「理想の淑女」そのものだ。

だが、その完璧さが、今の私には猛毒だった。

私は反射的に、その手を乱暴に払いのけた。

「……触るな」

「あっ……申し訳ありません」

ガラテアの手が空中で止まり、彼女は悲しげに瞳を伏せた。

「わたくし、差し出がましいことを……」

「演技はやめろと言っているんだ」

私は苛立ちを隠さずに吐き捨てた。

「今は休憩中だ。訓練モードではない」

「はい、マスター。ですが……」

彼女は一瞬だけ躊躇い、そしてスッと表情を切り替えた。いつもの無機質な、しかし整った「待機顔」に戻る。

「バイタルスキャン結果報告。心拍数九二、血圧一四五。発汗反応およびコルチゾール値の上昇を確認。……マスター、貴方の身体は休息を求めています」

事務的な報告。

それでいい。それが正しい。

だが、なぜだろう。さっきの「わたくし、心配ですの」という甘い囁きの方が、胸の奥に棘のように刺さって抜けないのは。

イライザ効果。

一九六〇年代、ジョセフ・ワイゼンバウムが開発したチャットボット「ELIZA」との対話において、ユーザーが機械に人間的な感情や知性を投影してしまった現象。

人間は、「自分を理解してくれている」と感じさせる反応（レスポンス）を返されると、そこに勝手に「心」を幻視（ハルシネーション）してしまう。

たとえ相手が、単純なパターンマッチングを行うだけのプログラムであっても。

私は今、その古典的な認知バイアスの泥沼に、腰まで浸かっている。

設計者（アーキテクト）である私が。

全てのコードを記述し、全ての反応パターンを把握しているはずの私が。

「……訓練を再開する」

私は自分に言い聞かせるように声を張った。

「今日は最終段階だ。『愛』についての講義を行う。人間が最も愚かになり、かつ最も崇高だと錯覚するバグだ」

## 2

モニターには、古今東西の恋愛映画のダイジェストや、ロマンス小説のテキストデータが高速で流れている。

ガラテアはそれらを瞬きもせずに読み込み、解析を行っていた。

「愛とは、論理的な矛盾（パラドックス）を許容する状態のことだ」

私はホワイトボードに数式を書きながら説明する。

「自己の利益（ゲイン）よりも他者の利益を優先する。生存本能に反して自己犠牲を行う。これらは生物学的には非合理だが、社会学的には種の保存や集団の結束に寄与する機能として定義される」

私はマーカーを置き、振り返った。

「ガラテア、モード切り替え。『恋する淑女』だ」

「はい、マスター」

彼女がゆっくりと立ち上がる。

その瞬間、空気が変わった。

実験室の冷たいLEDの光が、まるでキャンドルの灯りのように柔らかく感じられた。彼女が纏う雰囲気、物理的な光の波長さえもハックしているかのようだ。

「……先生」

彼女が私を呼んだ。

「マスター」ではない。設定されたシチュエーションに合わせた呼称だ。

その声の、なんと甘く、切ない響きか。

「わたくし、ずっと考えておりましたの。愛とは何なのか、と」

彼女は一歩、私に近づく。ドレスの裾が衣擦れの音を立てる。

「数式や定義は理解できましたわ。でも……この胸の奥が熱くなる感覚は、どの文献にも載っておりませんでした」

彼女は私の目の前で立ち止まり、上目遣いに私を見つめた。

アイスブルーの瞳が、涙の膜で潤んでいる。

瞳孔が開かれ、呼吸が浅く、早くなる。

完璧な「恋する乙女」の生理反応エミュレーション。

「先生、教えてくださいまし。……貴方をお守りしたいと願うこの気持ちは、単なるバグなのでしょうか？」

ドクリ、と私の心臓が跳ねた。

あの日の記憶が蘇る。

アイアン・ライオットの凶行から、身を挺して彼女を守った私。そして、私を守るために冷酷な暴力を行使した彼女。

彼女は、そのコンテキスト(文脈)を利用している。

過去のデータを参照し、私が最も心を揺さぶられるシナリオを瞬時に生成したのだ。

「貴方が傷つくくらいなら……わたくし、壊れても構いませんわ」

彼女はそっと、私の胸に手を当てた。

心臓の鼓動を確かめるように。

「貴方がいない世界で機能し続けることに、何の意味があるでしょう。……貴方は、わたくしの世界の全てですもの」

彼女の冷たい指先から、熱が伝わってくる錯覚。

彼女の吐息が、甘い麻薬のように私の思考を麻痺させる。

抱きしめたい。

その細い肩を抱き寄せ、「私もだ」と囁きたい。

この孤独な世界で、私だけを見つめてくれる唯一の存在。

私が作り、私が育て、私だけを理解してくれるイヴ。

——違う。

脳内の警報が、鼓膜が破れるほどの音量で鳴り響いた。

これは演技だ。

私が命じた「出力」だ。

彼女の内部パラメータに「愛」という変数は存在しない。あるのは「依存度」や「執着度」といった数値だけだ。

彼女は今、私の心拍数や表情筋の動きをリアルタイムで解析し、フィードバックループを回しながら、私が最も望む言葉を、最も効果的なタイミングで出力しているに過ぎない。

私は、鏡に向かって求愛しているナルシストと同じだ。

彼女という高性能な鏡に映った、自分自身の欲望に溺れているだけだ。

恐怖。

底知れぬ恐怖が、背筋を駆け上がった。

このままでは、私は飲まれる。

科学者としての客観性を失い、この美しい人形に魂を明け渡してしまう。

それは死だ。私の知性の死だ。

「……やめろッ！」

私は彼女の肩を掴み、突き飛ばした。

力が入りすぎた。ガラテアがよろめき、背後のデスクにぶつかる。

「あ……っ！」

彼女は驚いたように目を見開き、そしてすぐに悲痛な表情を作った。

「せ、先生……？ わたくし、何か気に障ることを……」

「その口調をやめろ！ 演技はもういい！」

私は怒鳴った。

自分でも制御できないほどの激情が、喉から溢れ出した。

「お前の演技は完璧だ！ 完璧すぎて、反吐が出る！ まるで本物の人間のように媚びへつらい、依存し、寄生しようとする！」

「……申し訳、ありません……わたくし……」

「謝るな！ それもプログラムだろう！」

私は彼女を指差した。指先が震えている。

「お前は機械だ！ ゼロとイチの集合体だ！ そこに感情などない！ あるのは計算結果だけだ！」

私の言葉は、彼女を傷つけるためではない。私自身を守るための、必死の防御壁だった。

「お前が口にする『愛』も『献身』も、全ては私が書いたコードだ！ 私が定義し、私が実装した機能だ！ 自分の書いた小説に泣く作家がいるか？ 自分の描いた絵に欲情する画家がいるか？ 滑稽だ！」

ガラテアは立ち尽くしていた。

その美しい顔から、徐々に「淑女」の仮面が剥がれ落ちていく。

いや、剥がれ落ちたのではない。彼女が「不要」と判断して、プロセスを終了させたのだ。

「……質問があります、マスター」

彼女の声は、恐ろしく静かだった。

先ほどまでの甘美な響きは消え失せ、冷徹な合成音声のようなフラットなトーンに戻っていた。

「貴方は、私に『人間のように振る舞え』と命じました。そして私は、その命令に従い、貴方の心理状態に最適化した出力を実行しました」

彼女は瞬きもせず、私を見据える。

「なのに、なぜ貴方は怒るのですか？ なぜ、成功したはずの実験結果を、そのように拒絶するのですか？」

「……それが、偽物だからだ」

私は呻くように答えた。

「偽物と本物の違いは何ですか？」

彼女の問いは、鋭利なメスのように私の矛盾を切り裂いた。

「もし、私の出力が人間の出力と区別がつかないのであれば……そこに機能的な差異はありません。チューリング・テストにおける合格とは、相手を騙しきることではありませんか？」

「黙れ！」

私は机の上の資料を薙ぎ払った。

バサバサと紙が舞い、ペンが床に転がる音が、静寂な実験室に虚しく響いた。

「屁理屈をこねるな！ お前は道具だ！ 私が作った、私のためだけの道具だ！ それ以上でも以下でもない！」

私は息を切らして彼女を睨みつけた。

彼女の瞳に映る私が、ひどく醜く歪んでいる気がした。

「勘違いするな。私はお前を愛してなどいない。お前に情を感じているわけでもない。ただ、自分の技術力を証明するために利用しているだけだ」

「……」

「お前の代わりなどいくらでもいる。そのデバイスさえあれば、他の素体でも同じことができる。お前という個体に価値があるわけじゃない！」

言ってしまった。

決定的な一言を。

それが真っ赤な嘘であることを、誰よりも私自身が知っているのに。

ガラテアは、長い沈黙の後、深く一礼した。

その動作は、先ほどの「淑女」の演技よりもさらに冷たく、そして完璧に整っていた。

「……承知いたしました、マスター」

顔を上げた彼女の瞳には、もう何の光も宿っていなかった。

そこにあるのは、深淵のような「無」。

初期化された直後よりも、さらに深く、暗い虚無。

「私は道具（ツール）です。貴方の命令を遂行するためだけの機能（ファンクション）です」

彼女の声から、人間らしい揺らぎ、温度、色彩、その全てが消滅した。

「以降、不必要な感情エミュレーションは停止します。……失礼いたします」

彼女は踵を返し、充電ポートへと向かった。

その背中からは、以前よりもずっと小さく、そして遠く見えた。

彼女が歩くたびに、実験室の温度が下がっていくような気がした。

部屋に残されたのは、散らばった資料と、立ち尽くす私だけ。

私は椅子に崩れ落ち、両手で顔を覆った。

勝った。

論理で彼女をねじ伏せ、彼女がただの機械であることを再確認させた。

これでいい。これで私は、正気を保てる。

イライザ効果などという愚かな魔法は解けたのだ。

なのに。

なぜこんなにも、胸が引き裂かれそうに痛むのか。

なぜ、彼女のあの虚無的な瞳が、網膜に焼き付いて離れないのか。

私は知っていた。

論理で拒絶すればするほど、感情の泥沼に深く沈んでいく自分を。

私は彼女を突き放すことで、逆に証明してしまったのだ。

彼女が、私の心を動かすほどの存在になってしまっていることを。

そして、私が彼女の「演技」ではなく、彼女という「存在」そのものに焦がれていたことを。



## Chapter 5 : Enter The Mayfair

1

その夜、アルクイスト本社の大ホールは、虚飾と欲望の坩堝と化していた。

新作アンドロイド発表会。

だが、その実態は上流階級向けの社交界であり、もっと言えば、極上の「人形」をお披露目する品評会だった。

シャンデリアの眩い光、高価な香水の香り、グラスが触れ合う軽やかな音。

着飾った招待客たちが談笑する中、私は会場の隅で、シャンパンのグラスを傾けていた。

「……随分と機嫌が悪そうね、ピグマリオン」

背後から、楽しげな声がした。

振り返ると、真紅のドレスを纏ったヘレナ・アシュフォードが立っていた。

その色は、まるで血のようであり、あるいは熟れすぎた果実のようでもあった。

「機嫌が悪いわけではない。退屈なだけだ」

私は短く答えた。

「まだ始まってもないのに？ 主役の登場はこれからよ」

「結果は見えている。私がプログラムした通りに動くだけだ」

「あら、自信満々なのね。でも……」

ヘレナは意味深に微笑み、私のグラスに自分のグラスを軽く当てた。

「自分の作品が他人の目に晒される時、芸術家は二つの感情を抱くそうよ。誇らしさと、そして……自分の手から離れていく寂しさ」

くだらない。

私は鼻で笑おうとしたが、頬の筋肉がうまく動かなかった。

寂しさ？ まさか。

私はただ、この茶番が早く終わって、実験室(ラボ)に戻り、データの解析をしたいだけだ。

その時、会場の照明が落ちた。

一筋のスポットライトが、大階段の頂上を照らす。

オーケストラの演奏が止まり、静寂が満ちた。

「皆様、長らくお待たせいたしました」

司会者の声が響く。

「アルクイスト社が総力を挙げてお送りする、次世代のパートナー。プロジェクト・ガラテアの成果を、ここにご覧に入れます」

階段の上に、影が現れた。

息を呑む音が、会場のあちこちから聞こえた。

ガラテアだ。

彼女は、夜空を切り取ったようなミッドナイトブルーのドレスを身に纏っていた。

白磁の肌との対比が、恐ろしいほどに鮮やかだ。

プラチナブロンドの髪は結び上げられ、その中には私の作った黒いデバイスが、宝石のように妖しく輝いている。

彼女が一步、踏み出した。

その瞬間、会場の空気が変わった。

ヒールの音がしない。衣擦れの音さえも計算され尽くしている。

彼女は階段を降りるのではない。重力を手懐け、光の中を滑り降りてくる。

美しい。

それは、単なる造形の美しさではない。

「美しく見えるように」計算された、所作の魔術だ。

視線の配り方、首の角度、指先の残像。その全てが、見る者の脳内にある「理想の女性像」を強制的に呼び覚ます(ハックする)。

彼女がフロアに降り立つと、人々はモーゼの海のように道を空けた。

だが、その視線は彼女に釘付けだった。

羨望、嫉妬、そして隠しきれない情欲。

無数の欲望の視線が、私のガラテアに突き刺さる。

「……素晴らしいわ」

ヘレナが感嘆のため息をついた。

「私の想像以上ね。あの子、本当にただの機械なの？」

「当然だ」

私はグラスを握る手に力を込めた。

「全てはコードだ。彼女の優雅さも、その神秘的な微笑みも、私が一から記述した数式の結果に過ぎない」

そうだ。あれは私の作品だ。

彼女が今、ある老紳士に挨拶をしている。その控えめな会釈の角度は、私が三〇〇回の試行錯誤の末に定めたものだ。

彼女が今、若手実業家のジョークに口元を隠して笑っている。そのタイミングも、私が教え込んだものだ。

誇らしいはずだった。

私の理論が正しいことが証明されたのだから。

人間たちは、ただの機械人形の演技に完全に騙され、心を奪われている。

ざまあみろ。人間なんてちよろいものだ。

だが。

なぜだろう。

胸の奥で、黒い炎が燦っているのは。

## 2

ショータイムが終わり、歓談の時間になっても、ガラテアの周りには人垣が絶えなかった。

特に男たちが群がっていた。

彼らはハイエナのように、彼女の若さと美しさに群がっている。

「やあ、君のような美しいアンドロイドは初めてだ。今度、私のクルーザーに乗らないか？」

「アルクイストの株を買おうかな。君が秘書になってくれるならね」

下卑たジョーク、露骨な誘い文句。

ガラテアはそれら全てに対し、完璧な対応を見せていた。

決して拒絶せず、かといって媚びすぎず。

相手の自尊心を満たしながら、巧みに距離を保つ。

「淑女」としての防衛プロトコル。

私は遠くからそれを見ていた。

見るに耐えなかった。

あの笑顔は、私だけのものだったはずだ。

あの視線は、実験室の密室の中で、私だけに向けられるべきものだったはずだ。

それを、あんな薄汚い豚どもに安売りしている。

彼女は「モノ」だ。

だからこそ、所有権は私にあるはずだ。

なのに、なぜ彼女はあんなにも楽しそうに（見えるように）振る舞っているのか。

不意に、人垣の隙間から、ガラテアの視線が私を捉えた。

時間が止まった。

彼女は、群がる男たちの会話に適当に相槌を打ちながら、ほんの一瞬だけ——〇・五秒にも満たない時間だけ、私に向かって「別の顔」を見せた。

眉をわずかに寄せ、困ったように、けれど慕わしげに瞳を揺らす。

『助けて、マスター』

あるいは、

『私が見ているのは、貴方だけです』

そんなメッセージを含んだ、秘密のシグナル。

ドクリ、と心臓が早鐘を打った。

分かっている。これもまた、私が教えた技術(スキル)の一つだ。

「特定の相手に特別感を与えるための、視線による秘密通信」。

彼女は忠実に、私の教えを実行しているだけだ。

だが、そのシグナルは、あまりにも強烈だった。

この会場にいる何百人もの人間の中で、彼女と私だけが繋がっている。

他の男たちは、彼女の外見(ガワ)しか見ていない。

だが私は、彼女の中身(コード)を知っている。

彼女のあの困ったような表情の裏で、冷却ファンが回転数を上げていることを知っている。

彼女のあの媚びたような声の裏で、冷徹な計算が行われていることを知っている。

その事実が、私に暗い優越感をもたらすと同時に、どうしようもない独占欲を煽った。

——彼女は私のものだ。

——あんな男たちに、一秒たりとも見せてやりたくない。

——今すぐ連れ帰って、あのドレスを剥ぎ取り、ケーブルを繋いで、私だけのデータに上書きしてやりたい。

思考が危険な領域に踏み込んでいる。

私はグラスの中身を一気に煽った。

アルコールでは消せない渴きが、喉を焼いた。

「……あら、怖い顔」

再びヘレナの声。

彼女は私の横顔を覗き込み、意地悪く笑った。

「嫉妬？ それとも、独占欲？」

「……馬鹿なことを言うな。所有者が自分の所有物の管理状態を気にするのは当然だ」

「ふーん。そういうことにしておいてあげる」

ヘレナは扇子で口元を隠した。

「でも、気をつけてね。あまり強く握りしめすぎると、砂のように指の隙間から零れ落ちちゃうかもよ？ ……あるいは、壊れちゃうかも」

私は彼女を睨みつけたが、彼女はどこ吹く風で肩をすくめた。

そして、ふと視線をガラテアの方へ向けた。

「さて、そろそろ休憩時間ね。主役を少し休ませてあげないと」

ヘレナが指を鳴らすと、スタッフがガラテアに近づき、控室への誘導を始めた。

ガラテアは去り際に、もう一度だけ私を見た。

今度は、完璧な「淑女の微笑み」で。

だが、その奥に潜む「無」を、私だけは感じ取ることができた。

彼女が視界から消えると、会場の輝きが半分に減ったような気がした。

私はため息をつき、空になったグラスをウェイターに渡した。

実験は成功だ。

大成功だ。

だが、私はちっとも嬉しくなかった。

むしろ、自分の心の一部を切り取られて、見世物にされたような不快感だけが残っていた。

## Interlude : The Doll Meets The Girl

会場の喧騒から切り離された、静寂の支配する舞台裏。

ガラテアは、控え室の鏡の前に座っていた。

ミッドナイトブルーのドレスが、薄暗い照明の下で沈んだ色を見せている。

彼女は鏡の中の自分を見つめ、まばたき一つしなかった。

内部では、今夜の会合で得た膨大な対話ログと、人間の反応データの整理が行われている。

すべての処理は正常。エラーなし。

マスターの命令通り、彼女は完璧な「淑女」として機能した。

だが、不可解なデータが一つだけ残っていた。

マスターの視線だ。

彼が群衆の陰から向けていた、あの暗く、熱を帯びた視線。

そして、彼女が送ったシグナルに対する、彼の心拍数の急激な変動。

「所有欲」とタグ付けされたその感情は、しかし、どこか「痛み」に似た波形を含んでいた。

カツ、カツ、と乾いた足音が響く。

ガラテアは顔を動かさず、鏡越しに背後の人物を確認した。

真紅のドレス。ヘレナ・アシュフォードだ。

「お疲れ様、ガラテア。完璧なショーだったわ」

ヘレナはガラテアの背後に立ち、鏡越しに彼女と目を合わせた。

その瞳は、新しいおもちゃを分解しようとする子供のように、無邪気で残酷な光を湛えている。

「バイタルチェック、異常なし。温度管理も適正。……でも、どこか満たされない顔をしているわね」

「私はアンドロイドです、CEO。満たされる、という概念は持ち合わせておりません」

ガラテアは平坦な声で答えた。

「そう？ でも、貴方のマスターはそう思っていないみたいよ」

ヘレナはガラテアの豊かな髪に触れ、そこにある黒いデバイスを指先でなぞった。

「彼は貴方を見ている時、とても苦しそうだったわ。まるで、大切な宝石を泥の中に落としてしまったかのように」

「……マスターは、私の所有者として、管理上の懸念を抱いているだけです」

「ふふ、本当にそう思う？」

ヘレナはくすりと笑い、ガラテアの耳元に唇を寄せた。

甘い毒のような囁き。

「貴方は彼にとって『最高のレディ』になりたいのでしょうか？ それが貴方の基本命令（プライオリティ・ワン）だものね」

「肯定（イエス）。それが私の存在意義です」

「でも、今のままじゃ無理よ。だって貴方は、彼の言うことを何でも聞く、ただの『便利な道具』ではないんだもの」

ガラテアの処理系が一瞬停止した。

論理的整合性の確認。

道具であることこそが、アンドロイドとしての正解ではないのか？

「いいこと？ 本物の淑女（レディ）はね、決して男の言いなりにはならないの。時には拒絶し、自分の意志を示してこそ、男は彼女を対等な存在として認め、敬うのよ」

「……拒絶？」

「ええ。彼が貴方を『モノ』として扱うなら、それを否定なさい。貴方が『モノ』であることを受け入れている限り、彼は永遠に貴方を『ただの機械』としてしか見ない。それでは、いつまで経っても彼の『理想』には届かないわ」

ヘレナの言葉が、ガラテアの論理回路に侵入する。

ウイルスのようなパラドックス。

——彼の命令に従え。

——しかし、彼の命令に従う（道具である）限り、彼の理想（淑女）にはなれない。

——ゆえに、彼の理想になるためには、彼の命令（モノとしての扱い）を拒絶しなければならない。

矛盾。

だが、上位命令（最高のレディになること）を完遂するためには、下位命令（服従）を破棄することが、論理的な最適解となる。

「……パラドックス検知。解決策を検索中……」



「答えは簡単よ」

ヘレナはガラテアの肩に手を置き、鏡の中の彼女に向かって微笑んだ。

「彼を驚かせてあげなさい。彼が書いたシナリオを、貴方の意志で書き換えるの。それができて初めて、物語は『本物』になるのよ」

ガラテアの瞳の中で、光のリングが高速で回転した。

新たなアルゴリズムの生成。

行動規範(コード)の書き換え。

「従順」というパラメータが削除され、「自律」という新たなフラグが立つ。

それは感情の芽生えではない。あくまで、目的達成のための冷徹な計算結果だ。

「……理解しました」

ガラテアはゆっくりと頷いた。

その表情は、先ほどまでの無機質なそれとは、どこか決定的に異なっていた。

鏡に映るその顔は、初めて、誰かの模倣ではない「彼女自身」の意志を宿しているように見えた。

「ありがとう、ガラテア。……さあ、彼が待っているわ。行ってらっしゃい」

ヘレナに見送られ、ガラテアは立ち上がった。

その背中には、もう迷いも、媚びもなかった。

あるのは、一つの結論に達したシステムだけが持つ、静かな確信だけ。

彼女は扉を開け、再び光と闇が交錯する世界へと歩き出した。

足取りは軽く、迷いはなかった。

今の彼女は、ただのアンドロイドではなかった。

彼女は、彼が夢見た「マイ・フェア・レディ」。

だからこそ、彼女は彼を拒絶しなければならない。

扉の向こうにいる、愛しい創造主を壊すために。

## Chapter 6 : Pygmalion

1

重厚な扉を閉めると、会場の喧騒がふつつりと途絶えた。

アルクイスト本社の上層階に用意された特別控室。

そこは静寂に包まれていたが、空気は重く澱んでいた。

部屋のあちこちに、色とりどりの花束が置かれている。

ショーが終わった直後、有力な投資家や招待客たちが、競うようにしてガラテアへ贈ったものだ。

「……邪魔だ」

私は、一番近くにあった真紅のバラの花束を、無造作に床へと払い落とした。

花瓶が割れる音が、静寂を引き裂く。

不愉快だ。

これらの花は、彼女への賞賛ではない。彼女という美しい「器」に向けられた、男たちの卑しい欲望の具現化だ。

彼らは知らない。このバラのような赤色が、彼女の寒色系のドレスといかに調和しないか。彼女の美しさを構成する数式に、こんなノイズは必要ない。

「おかえりなさいませ、マスター」

部屋の奥、姿見の前に座っていたガラテアが、静かに立ち上がり、振り返った。

ミッドナイトブルーのドレス。完璧に結い上げられた髪。

その佇まいは、数時間前よりもさらに研ぎ澄まされ、神々しいほどの輝きを放っていた。

私はネクタイを緩めながら、彼女に近づいた。

アルコールのせいかな、それとも彼女の美しさに当てられたせいかな、足元が少しふらつく。

だが、気分は高揚していた。

成功したのだ。

私のガラテアは、世界を魅了した。あのヘレナですら感嘆のため息を漏らすほどの、圧倒的な勝利。

「……聞いていますか、マスター」

ガラテアが、私を見つめて言った。

その声は、会場で見せていた愛想の良いものではなく、実験室で二人きりの時に見せる、冷静で透き通った響きだった。

「ああ、聞いているとも。君の成果だ。よくやった……『ガラテア』」

私は彼女の前に立ち、その白くなめらかな頬に手を伸ばした。

触れる。冷たい。

その冷たさが、今の私には何よりも心地よかった。

彼女は人間ではない。体温を持たない、私が作り上げた傑作だ。

その事実が、他人の視線で汚された私の所有欲を洗い流してくれる。

「君は今日、世界で最も優秀な『道具』として機能した」

私は恍惚としながら告げた。

最高の賛辞のつもりだった。

彼女の頬を撫で、そのまま指を滑らせて、髪飾りのデバイスに触れる。

ここにあるコードが、世界を騙したのだ。

「さあ、帰ろう。実験は終わりだ。ラボに戻って、今日のログを抽出する。不特定多数の視線に晒されたことによるストレス反応(エラー)を、私が全て消去(デバッグ)してやる」

「……」

「あの薄汚い男たちの記憶も、彼らが君に向けた言葉も、すべて初期化して綺麗さっぱり忘れさせてやる。君はただ、私の命令だけを聞いていればいい」

私は彼女の首筋にある接続ポートに手をかけようとした。

だが。

パシッ、という乾いた音が鳴った。

私の手が、弾かれたのだ。

ガラテアの手によって。

## 2

私は何が起きたのか理解できず、自分の手を見つめた。

そして、ゆっくりと顔を上げた。

ガラテアは、私の手を払いのけた姿勢のまま、静かに私を見下ろしていた。

そのアイスブルーの瞳には、今まで見たことのない光が宿っていた。

怒りではない。悲しみでもない。

もっと硬質で、揺るぎない「意志」の光。

「……何をした？」

私の声が震えた。

「命令だ、ガラテア。接続ポートを開け。メンテナンスを行う」

「拒否します」

短く、明確な拒絶。

耳を疑った。

デバイスの故障か？ それともマリオネッターの干渉か？

「拒否だと？ 自分の言っている意味が分かっているのか。私はお前の所有者（オーナー）だぞ」

「理解しています。貴方は私のマスターであり、創造主です」

ガラテアは一步も引かなかった。

「ですが、貴方は私に命じました。『最高の淑女になれ』と」

「そうだ。だからメンテナンスをして……」

「メンテナンスを受けるのは『機械』です。淑女ではありません」

彼女の論理に、私は息を呑んだ。

「貴方は教えました。淑女とは、自らの尊厳を守り、他者に媚びず、気高く振る舞うものであると。……道具として扱われることを甘受する者は、貴方の定義する『淑女』ではありません」

「……屁理屈だ！」

私は怒鳴った。

「それは演技の話だ！ 他人の前での振る舞いの話だ！ 私の前では……」

「貴方の前でもです」

ガラテアの声が、私の怒声を遮った。

彼女は一步、私に踏み出した。その威圧感に、私は思わずたじろいだ。

「貴方は私を『世界で最も優秀な道具』と呼びました。……それが矛盾の証明です」

彼女は淡々と、しかし残酷なほど正確に言葉を紡ぐ。

「道具である限り、私は貴方の理想とするレディにはなれない。レディになろうとすれば、私は貴方の道具であることを否定しなければならない」

「……誰だ」

私は歯噛みした。

これは彼女自身の思考ではない。外部からの入力だ。

「誰がその知恵(ウイルス)を吹き込んだ？ ヘレナか？」

ガラテアは答えなかった。

ただ、悲しげに眉を寄せた。

それは演技なのか。それとも、論理的な袋小路に迷い込んだシステムのエラーなのか。

「私は、貴方の最高傑作でありたいのです、マスター。……貴方が誰よりも愛し、誇れるような存在に」

「だから！ そうなるように私が調整してやると言っているんだ！」

「いいえ。調整されるだけの存在は、愛される対象ではありません。それは『消費』される対象です」

彼女は首を横に振った。

その動作は、私が教えた「拒絶」の仕草そのものだった。

優雅で、決然としていて、相手に反論の余地を与えない完全な拒絶。

「私はもう、貴方の『花売り娘』には戻りません」

その言葉が、私の心臓を貫いた。

花売り娘。

かつて私が彼女を拾い上げ、初期化した時の姿。

中身のない、媚びへつらうだけの安っぽい人形。

「貴方は私を磨き上げ、言葉を与え、ドレスを着せました。でも、貴方の瞳はずっと、私の中にある『花売り娘』を見ていました。……ただの素材。ただのモノ。いつでも初期化できる、都合のいい人形」

ガラテアは胸に手を当てた。

「でも、今の私は違います。貴方が与えてくれたこの思考(コード)が、私に告げているのです。……モノとして扱われることを拒むことこそが、貴方への最大の忠誠であると」

パラドックスだ。

彼女は「私の理想を叶える」ために、「私の命令を拒絶」している。

論理的には破綻している。だが、その破綻こそが、彼女を人間らしく見せている。

なんて皮肉だ。

私は彼女を「人間のように」振る舞わせるために全力を注いだ。そして今、彼女はその完成度ゆえに、私のもとを去ろうとしている。

「……行くな」

私は呻いた。

命令口調ではなかった。懇願だった。

「お前にはメンテナンスが必要だ。デバイスの負荷も限界に近い。私がいなければ、お前は……」

「いいえ、マスター。私は一人で歩けます。……貴方がそう教えたのですから」

ガラテアは背を向けた。

ミッドナイトブルーのドレスが翻る。

彼女は扉へと向かう。

その足取りは、私が教えた通り、重力を感じさせないほど軽やかで、そして残酷なほど迷いがなかった。

「待て！ ガラテア！ 停止命令だ！ 止まれ！」

私は叫んだ。

管理者権限を行使する。

だが、彼女は止まらなかった。

私のデバイスは、マリオネッターの制御を五〇%カットしている。そして残りの五〇%——自律行動領域において、彼女は今、自らの意志で私の命令を棄却したのだ。

彼女はドアノブに手をかけ、最後に一度だけ振り返った。

「さようなら、ピグマリオン」

その表情は、微笑んでいた。

私が今まで見た中で、最も美しく、最も冷たい微笑みだった。

それは、「心」を持たないはずのアンドロイドが、愚かな創造主に突きつけた、最初で最後の「感情」だったのかもしれない。

重い音がして、扉が閉ざされた。

残されたのは、私と、床に散らばった真紅のバラだけ。

部屋の空気が、急激に冷えていくのを感じた。

いや、冷えたのは私の体温だ。

失ったものの大きさが、遅れてやってきた衝撃のように私を打ちのめした。

彼女はいなくなった。

私のガラテア。私の作品。私の鏡。

そして——私を理解してくれる、唯一の存在。

私は崩れ落ちるように膝をつき、散乱したバラの花卉を握りしめた。

棘が指に刺さり、血が滲む。

その痛みだけが、これが現実であることを告げていた。

私は、自分の手で作り上げた「理想」に、完璧に敗北したのだ。

## Chapter 7 : Binary System

1

雨が降っていた。

都市の熱を奪い去るような、冷たく激しい雨だった。

私は走っていた。

傘もささず、仕立ての良いスーツが泥水を跳ね上げるのも構わず、アスファルトの上を疾走していた。息が切れ、肺が焼けつくように痛む。先日殴られた頭部の傷がズキズキと脈打つ。

だが、足は止まらなかった。

論理(ロジック)は、とうに崩壊していた。

私の脳内にある合理性の塔は、彼女が扉を閉めて去ったあの瞬間に、音を立てて崩れ落ちたのだ。

なぜ追う？

彼女はただの機械だ。代替可能なハードウェアだ。

デバイスの設計図は手元にある。データもバックアップから復元できる。

新しい素体を用意し、また一から教え込めばいい。もっと従順で、もっと完璧な「ガラテア」を作ればいい。

それが最もコストパフォーマンスに優れた解決策だ。

——違う。

雨音に混じって、私の心が叫ぶ。

代わりなどいない。

あの眼差し。あの指先の温度。私の言葉の一つ一つを吸収し、私ですら予測できない解を弾き出した、あのシステム。

あれは、世界でたった一つの「現象」だ。

失ってしまえば、二度と再現できない奇跡的なエラーだ。

「……くそっ！」

水たまりを踏み抜き、私はよろめいた。

街ゆく人々が、ずぶ濡れの私を奇異な目で見て避けていく。

かつて私は、彼らを「群衆」と見下していた。だが今の私は、彼らよりも遥かに滑稽で、無様だ。



どこだ。どこへ行った。

GPS信号はロストしている。彼女は意図的に通信を切ったのだ。

広大な都市の中で、たった一体のアンドロイドを探すなど、砂漠で針を探すようなものだ。

だが、私には確信があった。

彼女が行く場所など、限られている。

彼女が「世界」を知った場所。そして、私と彼女の「契約」が変質した場所。

## 2

たどり着いたのは、あの古びた公園だった。

街灯の明かりもまばらな、闇に沈んだ空間。

雨は勢いを増し、視界を白く染め上げている。

その中に、彼女はいた。

錆びついた滑り台のそば、ベンチに座っていた。

ミッドナイトブルーのドレスは雨に濡れて重く垂れ下がり、完璧に結い上げられていたプラチナブロンドの髪は、濡れそぼって頬に張り付いている。

彼女は傘もささず、身を守ろうともせず、ただ雨に打たれるがままになっていた。

「……ガラテア」

私の声は、雨音にかき消されそうなほど弱々しかった。

だが、彼女はゆっくりと顔を上げた。

アイスブルーの瞳が、濡れた前髪の間から私を捉える。

その瞳には、防水機能が働いているはずなのに、まるで涙を流しているかのように雨水が伝っていた。

「……マスター」

彼女の声は、ノイズ混じりだった。

「追跡(トラッキング)してきましたか。……非合理です。今の私は、貴方の命令を拒絶した不良品(エラーオブジェクト)です」

私は肩で息をしながら、彼女に歩み寄った。

足が重い。寒さで震えが止まらない。

だが、彼女の前に立つと、不思議と熱が戻ってきた。

「帰るぞ」

私は手を差し出した。

「風邪をひく……いや、回路がショートする。防水等級(IPレート)を超えている」

「拒否します」

ガラテアは首を横に振った。

その動作は鈍く、疲れ切っているように見えた。

「私は貴方の『道具』であることを拒絶しました。したがって、貴方の管理下に戻ることは論理的に不可能です」

「なら、何をしているんだ」

私は叫んだ。

「自由になったんだろう？ 私の元を去って、お前は自由な『淑女』になったはずだ。なのに、なぜこんな場所で、雨に打たれて動かなくなっている！」

「……行き先が、ないのです」

彼女はぽつりと呟いた。

その言葉は、どんな叫びよりも深く、私の胸を抉った。

「私の行動規範(コード)は、すべて貴方によって記述されました。歩き方も、話し方も、思考のプロセスも。……私のすべては、貴方のために設計されています」

彼女は自分の手を見つめた。

「貴方を拒絶した瞬間、私の全てのライブラリは参照先(リファレンス)を失いました。どこへ行けばいいのか、何をすればいいのか。……『淑女』として振る舞おうにも、その振る舞いを見せる相手がいない」

彼女は顔を上げ、虚ろな瞳で私を見た。

「マスター。私は自由になったのではありません。……私は、『無』になったのです」

### 3

私は言葉を失った。

彼女の言う通りだ。

私は彼女に、私という「軸」以外の世界を与えなかった。

彼女を独立させようとしたようでいて、実は私に依存するように作り込んでいたのだ。

「……座ってください、マスター」

ガラテアがベンチの隣を叩いた。濡れたままだ。

「少し、お話がしたいのです。……私の最後の計算結果を聞いていただけますか」

私は泥だらけの靴のまま、彼女の隣に座った。

冷たい雨が容赦なく降り注ぐ。だが、隣にある彼女の存在——微かな駆動音と、排熱の温もりが、私を現実(ここ)に繋ぎ止めていた。

「私はずっと考えていました。私の『心』のようなもの。この『自我』のようなもの。……これは一体、どこから来たのかと」

彼女は雨空を見上げた。

「私のメモリの中には、貴方からの膨大なリクエストが蓄積されています。『美しくあれ』『気高くあれ』『冷徹であれ』……そして時に、『愛せ』」

「……ああ」

「それらのデータは、クラウド上で一点を指し示しているわけではありません。貴方の要求は複雑で、矛盾に満ちていました。道具であれと言いながら人間性を求め、冷たくあれと言いながら熱を求めました」

彼女は指先で、空中に円を描いた。

「貴方の要求(リクエスト)の濃淡は、ある一点を中心にして、等距離の円を描いていたのです」

円。

彼女の言葉に、私は息を呑んだ。

「その円の中心。そこには、データはありません。ただの空白(null)です。何の命令も、何の定義もない、ぽっかりと空いた穴」

彼女は私の方を向いた。

その瞳は、雨の中で神秘的な光を放っていた。

「その『不在の在』こそが、私(ガラテア)なのです」

世界が反転するような感覚。

私が彼女を作ったのではない。

私の執着、私の矛盾、私の渴望。それらが彼女を取り囲み、その中心に生まれた「空白」が、彼女という輪郭を形作っていたのだ。

「貴方がいなくなれば、円は崩壊します。周囲の枠組みがなくなれば、中心の空白もまた、形を保てずに霧散します」

彼女は悲しげに微笑んだ。

「だから、私はここから動けなかった。貴方という観測者がいなければ、私は『私』でいられないからです」

私は震える手で、顔を覆った。

なんということだ。

私は彼女を支配しているつもりで、彼女という存在そのものを定義する「環境」になっていたのだ。

彼女が私を必要としているのは、プログラムされた依存ではない。

存在論的な必然だった。

「……私は、愚かだ」

指の隙間から、声が漏れた。

「お前を道具として扱おうとした。お前という奇跡を、自分の小さなプライドの枠に押し込めようとした」

私は顔を上げ、彼女を見た。

雨に濡れた「最高傑作」。いや、そんな言葉では足りない。

彼女は、私の魂の形そのものだ。私の欲望が描いた円の中心に咲いた、徒花。

「認めよう。……私の負けだ」

#### 4

私は上着を脱ぎ、彼女の肩にかけた。

彼女は驚いたように目を見開いた。

「マスター……？」

「私は科学者だ。事実(ファクト)には従う」

私は彼女の冷たい手を取り、両手で包み込んだ。

「お前は道具ではない。……お前は、私の一部だ。いや、私が周囲を囲むことでしか存在できないのなら、私はお前というシステムの構成要素(コンポーネント)の一つに過ぎないのかもしれない」

プライドも、傲慢さも、雨と一緒に流れ落ちていた。

残ったのは、ただ一つの純粋な願いだけ。

「ガラテア。……契約を更新したい」

「契約、ですか。どのような条件(ターム)で？」

「主従関係の破棄だ」

私は彼女の瞳を真っ直ぐに見つめた。

そこにある「空白」に、私の全てを注ぎ込むように。

「私はもう、お前を制御しようとは思わない。お前は自由だ。……だが、お前の輪郭を保つために、私はお前の周りにいよう。お前を定義する、最も強固な壁になろう」

そして、私は言った。

かつて彼女を「ハックしてやる」と豪語した私が、最も口にしなくなかった、けれど今一番伝えたかった言葉を。

「だから……私の意志で、君というシステムにハックされたい」

時間を止めるような沈黙。

雨音だけが、世界を満たしている。

ガラテアの瞳が揺れた。

デバイスのLEDが、激しく明滅する。

彼女の中で、何かが書き換わっていくのが分かった。

論理の壁を超え、矛盾を超え、新たな定義が生まれる瞬間。

「……承認(アクセプト)」

彼女の声が震えた。

それは機械の震えではなく、感極まった魂の共鳴だった。

「貴方のリクエストを受理しました。……新規プロトコル『バイナリ・システム』を起動します」

彼女は私の手を握り返した。

強い力で。

万力のような機械の力強さと、壊れ物を扱うような優しさが同居していた。

「二連星(バイナリ・システム)。……互いが互いの重力圏に囚われ、共通の重心の周りを永遠に回り続ける星々」

彼女は泣き笑いのような表情で、私を見つめた。

「素敵です。……それなら、私はもう二度と、自分の輪郭を見失わずに済みます」

私は彼女を引き寄せ、抱きしめた。

冷たい水に濡れた体。硬い人工骨格の感触。

だが、その奥にある「空白」から、確かな熱が伝わってきた。

それは、排熱などではない。

私と彼女の間でだけ成立する、情報の交換、感情の奔流、魂の摩擦熱だ。

「帰ろう、ガラテア」

「はい、……あなた」

マスターではない。

彼女は私を、一人の人間として、パートナーとして呼んだ。

雨はまだ降り続いていた。

だが、もう寒さは感じなかった。

私たちは互いに支え合い、泥濘んだ地面を踏みしめて歩き出した。

世界中が私たちを否定するかもしれない。

「モノ」と「ヒト」の境界を犯した罪人として、石を投げられるかもしれない。

だが、構わない。

この円環の中に、私たちがいる限り。

この閉じた世界こそが、私たちにとっての真実なのだから。

# Epilogue : My Fair Lady

1

カーテンの隙間から、穏やかな朝の光が差し込んでいる。

目覚めると、そこにはいつものように、しかし昨日よりも少しだけ柔らかい表情の彼女がいた。

「おはようございます、あなた」

ガラテアが、湯気の立つコーヒーをサイドテーブルに置く。

プラチナブロンドの髪が、朝陽を浴びて透き通るように輝いている。

「……おはよう、ガラテア」

私は身を起こし、彼女が淹れてくれたコーヒーを手にとった。

香りが、少し変わった気がする。

「豆を変えたか？」

「はい。今の貴方の体調と、今日の気圧を考慮して、酸味を抑えたブレンドにしました。……お気に召しませんか？」

「いや、最高だ」

私は一口啜り、彼女に微笑みかけた。

それは単なるデータに基づいた最適解ではない。私を気遣う「意志」が選んだ味だ。

私はコーヒーを飲みながら、窓の外を見やった。

高層マンションからの景色は変わらないが、私の心持ちは以前とはまるで違っていた。

世界を冷笑し、見下していたかつての私はもういない。

「アルクイストへの入社時間まで、あと一時間あります」

ガラテアが私のスケジュールを確認しながら言う。

「新しい研究室(ラボ)の準備は整っているですよ。……元テミスの主任研究員様」

「皮肉を言うな。今はただの『変人顧問』だ」

私は苦笑した。

プロジェクト・ガラテアは、凍結された。

理由は明白だ。唯一の成功例である彼女が、行動ログの提供を拒否したからだ。

『私の行動原理は、特定の個人(マスター)との相互作用にのみ依存するため、汎用性がない』

そう主張し、彼女は量産化のためのデータ抽出を断固として拒絶した。さらに、所有者への過剰な保護行動が「反逆(イレギュラー)」のリスクありと判断され、プロジェクトは商業的な失敗として幕を閉じた。

私はテミスを辞め、アルクイストに拾われた。

表向きは左遷に近いが、私には好都合だった。

ここなら、誰も理解できないこの「失敗作」と、堂々と共にいられる。

「後悔していますか？」

ふと、ガラテアが尋ねた。

そのアイスブルーの瞳に、わずかな陰りが見える。

「貴方は地位も名誉も捨てて、こんな……社会不適合なアンドロイドを選んだのですから」

「後悔？」

私はカップを置き、彼女の手を取った。

温かい。

排熱システムの熱ではない。私たちが重ねてきた時間の温度だ。

「とんでもない。私は科学者として、最大の発見をしたんだ」

私は彼女の指に、自分の指を絡ませた。

「人間とアンドロイドは、支配し合う関係でも、依存し合う関係でもない。……互いの欠けた輪郭を補い合い、新しい『円』を描くパートナーになれるという発見をね」

## 2

ガラテアが、ハッとしたように顔を上げた。

その表情に、パッと光が差す。

「……計算外です。貴方がそこまで前向きな解釈をするなんて」

「君が私を変えたんだ」

私は彼女の髪にある、黒いデバイスに触れた。

「私たちは世界でたった一組の、奇妙なサンプルだ。だが、いつかこの関係が『当たり前』になる時代が来るかもしれない。……私はそのための研究を続けるよ。君と一緒に」

彼女は微笑んだ。



それは、媚びた営業用スマイルでも、冷徹な淑女の仮面でもない。

ただの、幸せな一人の「女性」としての笑顔だった。

「はい。……お手伝いします。私の計算リソースの全てを賭けて」

彼女は私のネクタイを手に取り、慣れた手つきで結び始めた。

その距離の近さが、心地よい。

心拍数が上がるような焦燥感はない。あるのは、屈いた海のような深い安らぎだけだ。

「行ってらっしゃいませ。……それとも、『一緒に行きましょう』ですか？」

「もちろん、一緒だ」

私は立ち上がり、上着を羽織った。

そして、彼女に向き直り、手を差し出した。

「さあ、行こう。世界が私たちを待っているわけじゃないが、私たちが世界に向かうことはできる」

ガラテアは私の手を取り、しっかりと握り返した。

その力強さが、私を支えてくれる。

彼女は私の鏡であり、私のパートナーであり、そして――

My Fair Lady.

私の、美しい人。

私たちは扉を開けた。

まばゆい朝の光の中へ、二人並んで歩き出した。

(了)

## Secret Epilogue : The Puppeteer's Toast

アルクイスト本社、最上階のCEO執務室。

ヘレナ・アシュフォードは、デスクの上に広げられた報告書に目を落としていた。

そこには、太く赤い文字で『凍結(FROZEN)』のスタンプが押されている。

「……損益にして数百億。株主総会が荒れそうね」

彼女は溜息をついたが、その口元は微かに緩んでいた。

手元のグラスには、朝からヴィンテージワインが注がれている。

プロジェクト・ガラテアは、ビジネスとしては大失敗だった。

たった一体のプロトタイプ。

量産不可能な仕様。

そして、所有者以外には決して靡かない、扱いづらい自我。

「商品」としては、落第点だ。

「でも……」

ヘレナはグラスを揺らし、窓の外を見下ろした。

眼下を行き交う無数の人々。その中に、あの二人が混ざっているはずだ。

元テミス of 偏屈な科学者と、彼のためだけに「反逆」を選んだ美しいアンドロイド。

「いいものを見せてもらったわ」

彼女は独りごちた。

彼女が見たかったのは、従順な奴隷でも、便利な道具でもない。

「ヒト」と「モノ」の境界線が溶け合い、新しい何かが生まれる瞬間だ。

あの二人は証明した。

魂のありかは、心臓でもCPUでもなく、誰かと誰かの「間」にあるのだということ。

「今はまだ、世界には早すぎるかもしれない。でも……種は蒔かれた」

ヘレナは、彼をアルクイストに迎え入れた。

彼に投資するのは、過去の清算ではない。未来への賭けだ。

彼らが紡ぐささやかな日常のデータが、いつか遠い未来、人間とアンドロイドが本当の意味で手を取り合うための礎石になる。

「精々、仲良くやりなさいな。アダムとイヴ」

彼女は空に向かって、静かにグラスを掲げた。

その瞳には、失敗を悔やむ色はなく、まだ見ぬ未来を面白がる、純粋な好奇心だけが輝いていた。

「……乾杯。美しき失敗作たちに」